第62号
令和３年
１１月１日

題 字
植 木 満
初代東進会会長

東進

発行所
土浦一高東進会
茨城県立土浦一高
進修同窓会東京支部

発行人
東進会会長 飯塚 哲哉

事務局　〒102-0093　東京都千代田区平河町２－７－４　砂防会館別館６階
宮崎法律事務所　気付　東進会事務局
TEL（FAX）　０３－５４２１－５３２１
E－mail：toshinkaisecretary@gmail.com
ホームページ　https://to-shin-kai.jimdo.com/

提供　青木　功（フォトグラファー　昭和５０年卒）

■２０２１年（令和３年）
東進会通常総会のご報告
東進会・企画委員会
■赴任のご挨拶と一高の近況
中澤　斉（土浦一高　校長昭和 56 年卒）
■ご挨拶
大野　金一(進修同窓会会長昭和31年卒)
■『スポーツとジェンダー』
江橋　よしのり（平成３年卒）
■「過ぎ来し方への雑感」
山本　嘉子（昭和 31 年卒）
■第 21 回アカンサスクラブ講演録
「守谷における地域コミュニティの地方創生
事業への取り組みとコロナへの対応」
伊東　明彦（平成５年卒）
■リレー放談（第１２回）
「LIFE SHIFT 100 年時代の体験」と
「なのはなコンペ２０２１」のご紹介
池和田　暁（昭和 40 年卒）

２０２１年(令和３年) 東進会通常総会のご報告

「東進会通常総会」は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、今年も昨年に引き続き、オンライン形式での開催となりました。

令和３年6月20日(日)午後1時から「通常総会」そして、その後に「講演会」という構成でした。予想以上に多くの会員の皆様にオンラインでご参加いただきました。

東京都においては、3度目の緊急事態宣言発出と東京オリンピック・パラリンピック開催を1か月後に控えた大変な時期とちょうど重なってしまいました。

会員の皆様が楽しみにされていた先輩、後輩、老若男女が一堂に会しての恒例の懇親会は残念ながら、今年も見送りとなりましたが、来年こそは「総会懇親会」が開催できることを願っております。

当日の議事次第と参加状況は以下の通りです。

【総会】

●会長挨拶
　東進会会長　飯塚　哲哉

●来賓あいさつ
　土浦一高　校長　中澤　斉様
　進修同窓会会長　大野　金一様

●審議事項
　議案１　２０２０年度決算報告
　議案２　２０２１年度予算案
　委任状による書面表決１１７名中
　　賛成１１７名、反対０名
　オンライン参加３４名中
　　賛成34名　反対０名
　合計　賛成１５１名　反対０名

いずれも全会一致で原案通り承認されましたことをご報告いたします。ご協力ありがとうございました。

【講演会】

●講師
　江橋　よしのり様
　フリーライター・児童文学小説家

●演題「スポーツとジェンダー」

なお、今年度の会費納入が未だお済みでない方は、指定口座へのお振込みをお願いいたします。

東進会・企画委員会

赴任のご挨拶と一高の近況
中澤　斉　土浦一高校長　(昭和56年卒)

今年4月に、土浦一高の校長として赴任しました。どうぞよろしくお願いいたします。東進会の皆様には、日頃より、物心両面に渡りまして多大なるご支援を賜り、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

昨年から続くコロナ禍は、未だ終息の見通しが立ちませんが、一高では、生徒・教職員が、感染防止に留意し、工夫をしながら教育活動を行っています。最近の一高の様子についてご紹介します。

今年最大の出来事は、土浦一高附属中学校が開校したことです。4月7日、大井川県知事の「開校宣言」に続き、第1回入学式を行いました。茨城県では、県立の中高一貫校が続々と開校しており、一高附属中は、定員80名(男女各40名)、2クラスでの開校となりました。中学生は、高校生と同じフロアで授業を受けており、とても楽しそうに学校生活を送っています。今後の成長が楽しみです。

次に、高校生についてです。県下随一の進学実績は、現在も変わることなく、今年も東京大学22名、国公立大医学部医学科12名を始め、多くの難関大学に進学しました。その先輩達に続けと、後輩たちも日々頑張っています。

また、部活動では、陸上部、ヨット部などが関東大会出場、水泳部、囲碁部が全国大会に出場するなど活発に活動しています。行事では、昨年は中止だった一高祭を、6月5日、6日に開催しました。感染防止の観点から、一般公開を取りやめ、校内発表のみとしましたが、大いに盛り上がりました。

海外研修については、3月に実施する方向で、現在慎重に準備しています。定時制についても、定通体育大会で、バドミントン部と陸上部が、県大会優勝し、全国大会に出場することができました。

生徒達は、一高の伝統を守りながら、充実した学校生活を送っています。

東進会の皆様には、今後とも本校への変わらぬご支援をお願いし、併せて、東進会の益々のご発展と会員の皆様のご健勝とご活躍をご祈念いたします。

ご挨拶
進修同窓会会長　大野　金一　(昭和31年卒)

東進会の皆さんこんにちは。今日は、土浦一高進修同窓会の立場で、ひたち野うしくの事務所から参加しております。同窓会がこういう形でしかお会いできないというのは寂しい限りです。

進修同窓会の本部も、今年度は、昨年同様、総会は開かず、3月にホテルマロウドで開催した評議員会の議決をもって総会議決に代えるという方法をとらせていただきました。

卒業６０・５０・４０・２５・１５周年記念祝賀式も中止とするが、今年も、昨年同様、自発的に学年会を開催される場合は、会長が記念品を持ってお祝いに行くということにしていましたが、今年も昨年同様、自発的に懇親会を開催する年次はありませんでした。伝統的な各周

年の祝賀ができないのは残念至極ですが、それは、11月に刊行される土浦一高進修同窓会会報をもって祝意をお伝えすることにしています。

進修同窓会は、本部の総会の出席者が毎年各周年行事の参加者が殆どなので、実質的には、各支部の活動が必然的に中心的な役割をしているわけですが、コロナ禍の下では、各支部の活動もいろいろ制約を免れません。

支部と言えば、わたしが以前から支部の設立を訴えてきたつくば支部がようやく設立の運びとなりました。

この3月の総会に代わる評議員会で正式に「つくば支部」の設立が承認され、前に東進会のアカンサスクラブで未来のロボットタクシーについて講演をしてくれた本部役員の塚本一也君がつくば支部設立の決意を語ってくれました。

つくば支部が誕生すれば、地元土浦支部に次ぐ大所帯になると思いますので地元の支部として活発に活動されることを期待して止みません。

以上をもって、土浦一高進修同窓会からのご報告とさせていただきます。

【お知らせ】

令和3年9月、進修同窓会臨時正副会長会において協議の結果、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない情勢に鑑み、令和4年4月23日（土）に開催予定の「進修同窓会定期総会」および「周年記念祝賀会」を令和3年度に引き続き中止することを決定しました。

『スポーツとジェンダー』
江橋よしのり（平成3年卒）

実は２０２０年に、東京オリンピック・パラリンピック開催にちなんでスポーツを題材とした講演のオファーをいただいていました。本来でしたら昨年度の東進会でみなさんの前でお話しする予定だったのですが、コロナ禍で会合が中止となり、東京オリパラとともに一年延期。かつリモートでの講演となりました。

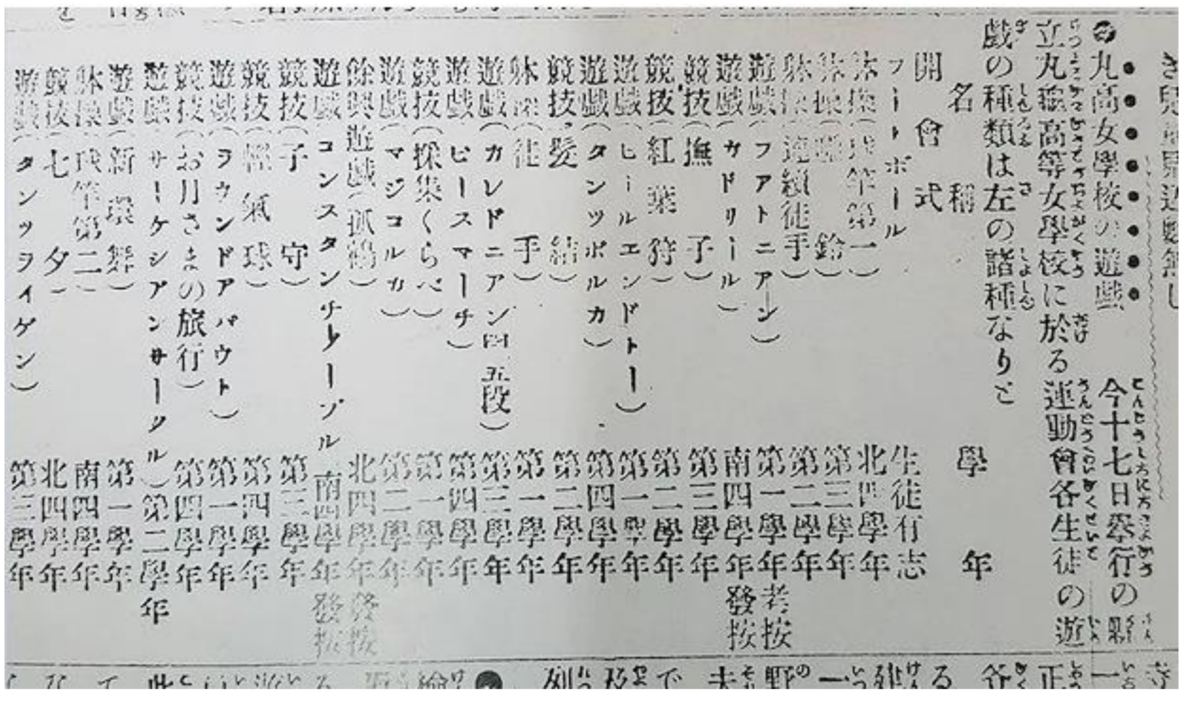
■近代スポーツと女性

古代ギリシャの競技祭典であったオリンピックは、フランスのクーベルタンらによって近代に復興されました。１８９６年に第1回アテネ大会が開催されますが、女性は選手として出場することが認められませんでした。ＩＯＣ（国際オリンピック連盟）の初代事務総長となったクーベルタンは「オリンピックで女性がなすべき役割は競技以外にある。たとえば男性の勝者に冠を授けることだ」と主張しています。

母となる女性の体を保護すべきだとする観点から、肉体を消耗する激しいスポーツは女性に対し推奨されず、また、女性が競技に参加すれば好奇の目にさらされるといった意見も支持された時代でした（後者は現在もなお「女性アスリート画像の性的悪用」として問題視されています）。続く第2回パリ大会で、テニスとゴルフの2競技に限り女性の参加が認められます。しかし、選手のユニフォームは長袖シャツとロングスカート。肌の露出は極力抑えられていました。

同じ頃の日本国内の状況を見てみると、１９０６年（明治39年）に香川県・丸亀高等女学校（現在の県立丸亀高校）の運動会で生徒有志による「フートボール」が行われたことが当時の新聞記事から分かっています。フートボールとはフットボール、つまりサッカーのことです。

（＊下段の写真は丸亀高校提供）


◎丸高女學校の遊戯

今十七日擧行の縣立丸龜高等女學校に於る運動會各生徒の遊戯の種類は左の諸種なりと

名稱	學年
開會式	生徒有志
体操（□年第一）フートボール	北學年
体操（啞鈴）	第三學年
体操（連續徒手）	第二學年
遊戯（ファトニアーン）	第一學年
遊戯（サドリール）	南四學年　老抜
競技（撫子）	第三學年
競技（紅葉狩）	第二學年
遊戯（ヒールエンドトー）	第一學年
遊戯（タンツポルカ）	第四學年
競技（髪結）	第二學年
体操（徒手）	第一學年
遊戯（カレドニアン四段）	第三學年
遊戯（ピースマーチ）	第四學年
競技（採集くらべ）	第一學年
遊戯（マジコルカ）	第二學年
餘興遊戯（孤鶴）	北四學年　發抜
遊戯（コンスタンチノープル）	南四學年　發抜
競技（子守）	第三學年
競技（紙風球）	第四學年
遊戯（ラウンドアバウト）	第一學年
競技（お月さまの旅行）	第四學年
遊戯（サーケシアンサークル）	第一、第二學年
遊戯（新環舞）	第一學年
体操（□年第二）	南四學年
競技（七夕）	北四學年
遊戯（タンツライゲン）	第三學年

この女学校ではしばらくサッカーが行われていたようですが、１９２０年（大正9年）に学校所有のボールがすべて廃棄処分されたという帳簿も見つかりました。廃棄された理由は定かではありませんが、丸亀高女の歴史に詳しい研究家は、この年に赴任した新校長がクーベルタンらと同様の考えで、良妻賢母教育の場にサッカーはふさわしくないと判断したのではないかと推察しています。

この丸亀の例のように、明治の終わりから大正期にかけて女性スポーツは開放と抑圧の間を行ったり来たりしていますが、１９２４年（大正13年）に二階堂体

操塾（現在の東京女子体育大学）の人見絹枝が明治神宮大会の三段跳で10ｍ38の世界記録を打ち立て（現在は非公認扱い）、脚光を浴びます。人見は１９２８年アムステルダムオリンピックに初の日本女子選手として出場し、８００ｍで銀メダルを獲得しました。

■なでしこジャパン結成から世界制覇までの競技環境

女子サッカーの日本代表が初めて結成されたのは１９８１年。いわば黎明期のなでしこジャパンですが、競技人口も少ない中で全国からかき集められた代表メンバーの大半は競技歴が浅く、ほぼ初心者ともいえる選手も混じっていたようです。競技運営サイドも大会やチームを創設することで手一杯なところがあり、選手たちは高いレベルの指導を受けたことのないまま引退していきます。

１９９６年アトランタオリンピックから女子サッカーが正式種目に採用されると、国内の各チームで強化が本格化します。「甘えるな」「女性だからといって手加減はしない」と、選手たちに高水準のプレーを求める監督が増えてきました。

ところが、中には「月経痛ぐらい我慢しろ」といった無理解や、「髪型や服装が女性らしくない選手がいるから、女子サッカーは社会に許容されない」というような偏見もはびこり、そのような主張をなんと女性コーチが口にする場面さえありました。

ここまでの間、日本女子サッカーの実力がなかなか伸びなかった社会背景には、「女性はこうあるべきだ」「女性にはこんなプレーはできない」のような先入観が存在していると思います。他人の先入観を植え付けられるから、選手本人も自分に限界を設けてしまう。すると先入観を超えてくる選手が出てこないので、他人の先入観がますます補強されてしまう。というスパイラルです。

私の大学時代の友人に外資系企業の役員に就任した女性がいます。彼女は、こうした「他人と自分の先入観が補強し合っている」状態は日本の管理職に女性が増えない理由と同じではないかと私見を述べています。

さて、２００８年の北京オリンピックを契機に、先進的なプレースタイルと生き生きしたキャラクターを備えたなでしこジャパンは、世界で注目されるチームになっていきました。２０１１年、東日本大震災のあった年にワールドカップを制した澤穂希選手たちの姿を覚えている方も多いと思います。

この個性的で魅力的なチームを築き上げたのは、佐々木則夫監督でした。過去の少なくない指導者たちが先入観をもとに「上から目線」で選手たちを見ていた反面、佐々木監督は男子の日本リーグ監督経験者でありながら「僕は女子サッカーの新米指導者です」と自ら宣言し、目の前の選手たちに最適な戦術、最適な環境、最適な能力の引き出し方を試行錯誤しながら練り上げていきました。

特に、チームドクターとして外科医だけでなく、婦人科（女性診療科）の医師を帯同させたことは慧眼でした。かつて「月経痛は甘え」のような理不尽なことを言われて我慢してきた選手たちにとってみれば、体の悩みやその対処法、女性アスリートに顕著な怪我の予防法などを科学的にレクチャーされたことが好パフォーマンスを生み出す一因にもなったようです。

そうしてチームを世界一に導いた佐々木監督は、誠実でユーモアもあるキャラクターも相まって、メディアから「女性を率いる理想のリーダー」「女性に好かれる上司」と呼ばれて大人気でした。

しかし、彼は自身の著書でも語っているとおり「女性だからこうすればいい」とは考えていません。あくまでも「目の前の選手たちの目標を叶える」ために良質なコミュニケーションをとりながら、試行錯誤を繰り返してチームを強化していったのです。「選手は乗客、監督は馬車。目的地に送り届けるのが僕の仕事」とは、佐々木監督の名言です。

■女性スポーツと現代社会

２０１１年、勝負を諦めず粘り強く勝ち抜いたなでしこジャパンが震災復興のシンボルとして応援されたように、アスリートの振る舞いが社会に連帯感を生み出すことがあります。

ジェンダー的視点で見れば「女性スポーツと女性社会」を連帯させる最も先進的な取組を米国女子サッカーが実施しています。

２０１９年３月の国際試合に臨んだ米国女子代表の各選手は、「国際女性デー」にちなんでシャツの背中に「自分が影響を受けた女性の名前」を刻んでグラウンドに登場しました。

（＊左画像はＣＮＮニュースサイトより）

Forward Carli Lloyd switched her usual jersey for one honoring Nobel Prize winner Malala Yousafzai.

例を挙げると、パキスタンの人権運動家でノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイ、米国初の女性宇宙飛行士サリー・ライド、『ハリーポッター』作者のＪ・Ｋ・ローリング、歌手のビヨンセなど、多様な時代、多様なジャンルの女性の名が並びました。このような取組があるからこそ、米国女子サッカーはただのスポーツ団体ではなく、女性の連帯を呼びかける団体として支持されています。多くの人々は彼女たちが「サッカーの代表」だからではなく「私たち（女性）の代表」だから応援しているのです。

■連帯か分断か

このようにアスリートの発信力・影響力が増大するに至った現在、彼女ら・彼

らが社会に向けて発するメッセージが政治性を帯びるケースも発出しています。
　オリンピックはこれまで、競技フィールド上での政治的主張を一切認めていませんでした。しかし今回の東京大会でＩＯＣは、黒人差別に対する抗議のニーダウン（膝つき）パフォーマンスを許容しました。アスリートによる主張がより先鋭化されていくと、スポーツが新たな分断を生む場になるかもしれないと、少々心配しています。

過ぎ来し方への雑感

山本嘉子（昭和31年卒）

　一高卒業の後、東京に六十五年、間に海外暮らしも経て昨年、土浦に舞い戻りました。長引くコロナ不安に外出も成らず、「東京じゃなくても……」と思ったことが発端でした。小さな庭に藤色のジャカランダの花が咲いた六月、一気に決めた移住でした。
　周囲は「まさか」「無理でしょう」「八十過ぎてるのに」等々、別暮らしの長男家族からも其々に、「何があったか」「どうしたのか」と、心配されました。何事も自分が決めて動く生活でしたので、周囲の声が新鮮で、改めて一人暮らしの年月を思いました。
　五十五歳、思わぬ時に夫を病に奪われ、その先を思って家を建て替えるのに約一年、五十六歳で向き合ったこの大仕事は、世間の様々を学ぶ貴重な場になりました。一人に相応の家の完成は、新たなスタートの時になりました。仕事は六十五歳まで続け、その間、いつか実現できたらと思う夢もありました。
　土浦一高に入学したのは、男女共学になって四年目のこと、入学者三百五十人中に女子は四人、並んだ列の四列だけ先頭は女子でした。女子に制服は無く、先輩女子たちの自由で個性的な服装に目を見張りました。女子の居心地は未だぎごちなく、読書に時間を費やしたことを覚えています。祖父の隠居所に、改造社の日本文学全集や岩波の漱石全集などがあり、内田百閒や寺田虎彦などから、随筆の自由な愉しさを知ったのはその頃でした。
　英語のご指導を受けた先生が、記憶に鮮明です。授業は熱く脱線、雑談は高度な内容で、必死に背伸びをしました。ラッセルの「幸福論」を知ったのも、オスカーワイルドやヘミングウェイの作品を原書で読むことを薦められたのもこの授業でのことでした。英語版「老人と海」を読んだ時の気持の高揚を未だに覚えています。
　「この先の日本、必ず女性が活躍する時代が来ます。その時、英語は間違いなく必要言語です。その英語で何をするか、を……」心に残る熱いメッセージでした。
未熟な時代には迷いも多く、進路が決まるまでには二転三転がありました。
　進学先は津田塾大学、その年の同期生は百六十人、緊張の中で始まった授業は、いずれも厳しいものでした。多少の英文法知識で、英語の本を読む程度は誰もがしてきた事、本物の英語を聞いているのに内容が聴きとれない。次第に気重くなりました。
　夏休みが目前になった頃、聴きとりに悩むのは自分だけではない、ということが分かります。少し安堵はしましたが、四苦八苦は続きました。友人間での切磋琢磨、先輩の体験談、諸先生、外人教師の個別対応など、すべてを糧に、頼りにもして二年が過ぎました。
　大学は緑濃い武蔵野の中、小平にあります。その敷地内の一郭に、前身の「女子英学塾」を創立した津田梅子先生の墓地があります。入学当初、その場所で、自分の誕生日は創立者が亡くなられた日であると知りました。その日が巡ると、未だに母校での諸々が想起されます。
　大学卒業は一九六十年。近年、女性が、積極的な発言、行動と共に、様々な分野で本物の活躍をしています。一高在学中の恩師の言葉が、日本で今、現実のことになっています。自分が社会に出た頃の残念な現実は過去のものになったようです。
　卒業後には出版や書物に関わる仕事を探しました。学校からの推薦状を手に、最初に訪ねた出版社でのこと。緊張して名乗った自分が訊かれたことは、極めて簡単でした。
「短大？　よん（四）大？」
「四大です」
「短大ならいいんだけどねぇー」
　その後に訪ねた数社でも同様のこと、
「女子の採用予定はなし」
「雑用なら……」
「直ぐに結婚するんでしょう」
　就職先はなかなか決まりません。
　当時、書店に小型の月刊雑誌「リーダーズ　ダイジェスト」がありました。発行元はアメリカにある出版社。百か国以上、三十五の言語で出版され、ひと頃四千万以上の読者がいたと言われます。その雑誌には魅力的なキャッチコピー「America in your pocket」があり、当時の自分には、世界の話題を平易な英文で読める、重宝な参考書のようなものでした。その日本支社が、四大卒二名を募集しました。
　受験を決め、訪ねた会社は、現在パレスサイドビルが建つ場所にあり、社屋は広い敷地に総ガラス張り、皇居を囲むお堀端の一郭に面していました。受験者は五、六十名の男性と数名の女子学生。筆記試験が二時間。面接試験を待つ間は流石に緊張しました。
　部屋には扇形に並んだテーブルに男性五人の試験官。中三人が外国人。中央は支社長で、質問はすべて英語でした。「当社の何を知って受験したのか」「その上で、当社には何で貢献できるか」ここまでは、小型雑誌が役立ち、「……英文タイプが打てる……」と話すや、目の前にタイプライターが運ばれ、英文ぎっしりの原稿も用意済みです。救いはタイプライターが、自分所有のレミントンランド社製の同型であったことです。それでも作業は躓きばかり。「そこまで」の声の後、三人が結果を審査の様子。その後、日本人役員から流暢な英語で訊かれたことには、更に驚きました。
　「あなたのそれらの力でこの会社に貢献したとして、会社にリクエストするペイ

メントはどれほどか?」当時、日本企業での四大卒初任給は九千八百円。前年外資系に就職した先輩の話、一万三千五百円が浮かびます。一万二千円。咄嗟のリクエストでした。

翌年、四月から竹橋への通勤が始まりました。職場には男性女性共に若い層が多く、勤務は月曜から金曜までの週五日、給料も週給制でした。決められた仕事はすべて自己責任制、頑張れば早く終れる、残業はなし。退社時間は其々で、声は掛け合いますが、仕事への助け合いはなし、良い意味の個人主義が行きわたっていました。

最初の金曜日、社への貢献何もなしの時、それでも給料袋を頂きました。自己申告額のきっちり四分の一が計算されています。但し、一、二か月のことで、仕事に慣れるにつれて、自分の貢献の度合いがしっかり査定されていることが分かります。一喜一憂の金曜日は己の評価を知る日でした。

仕事では、上司からの叱咤続き。自分の英作文にRewriteの赤字が無くなるまでには、相応の日々がありました。読み易い英文、こなれた英文とは、を学んだ上司、職場の師は小平に同じ思いのある大先輩でした。

社内行事には、当時、珍しかったことがあります。社屋裏手の庭園で、金曜日のアフターファイブに、よくガーデンパーテイが開かれました。夜の庭園は雰囲気一新、四辺にバイキングの屋台が並び、社員が親睦を深める場になり、家族、仕事先、知人、友人の参加自由、最後には野外ダンスパーテイになります。いつも賑わい、人に出逢う場所でもありました。

当時はマスメディアの急速な発達、広がりの時期で、会社自体は雑誌以外への進出も模索した時でした。夫の転勤が切っ掛けで退社をしたのは、社屋が移転する前のことでした。都内私立女子高校に正規の勤務を始めたのは、三十代半ば、それまでには結婚、子育てに数年を過ごしての社会復帰でした。

やがて、日本はバブル期に向かい好景気が始まり、各企業は活気に溢れて外国への進出も盛ん、企業戦士なる言葉も生れ、夫も該当者の一人だったと振り返ります。

その頃、外国から日本に来る年輩会社人の殆どが夫人を同伴すると聞きました。或るアメリカ企業の要人、その夫人から日本の企業体質にクレームがあったとのことです。

「主人の活躍はbetter-halfの自分あってのこと、なのに日本の会社は滞在中に夫の接待はするのに、自分はホテルに置き去りばかり……」

このことが巡り巡って、ホテルに置き去り夫人Mrs.フランケルと知り合うことになり、滞在中の一週間、希望の場所に同行することになりました。その目的地に驚きました。早朝の魚河岸、竹林で有名な鎌倉の報国寺、そこでのティーセレモニー体験を希望、歌舞伎鑑賞に銀座のデパート、足利市の栗田美術館から京都にまで。ぎっしりのプランでした。

この一週間が、連鎖的に熟年外国婦人たちとの交流を広げることになり、各地に行動を共にしながら、自分の生きた勉強の場になり、更の展開で、しばらくの間不定期の仕事になりました。中で、Mrs.フランケルや英国のジェニーなどには自宅に招かれたり、彼女たちの家族を日本に迎えたりして交流が続きました。正規の仕事、私立女子校への勤務もあり、最も多忙な時でした。

五十歳を挟んでの数年は、個人的には向かう強風に吹き晒されるような出来事が続き苦しい時。退職は六十五歳の時でした。

時間に余裕が出来た日々には、長く抱えていた「書く楽しみ」を専らとしました。日常雑感を内容として「チューリップが好き」「ジャカランダ幻想」を、最新では「利休鼠の雨」を本にしました。「ジャカランダ幻想」は自費出版文化賞随筆部門の入選作品になりました。生きた道、素の自分、全てを露わにしたものが、共感者に出逢った気分で、嬉しいことでした。すべては出版界で活躍された母校の同期生のお助けに縁ることでした。

昨年の引っ越しは大仕事でした。友人から「手伝うよ」「頑張り過ぎない。気軽に頼もうよ」とメールや電話の応援。複数回引越し経験の友人からは「引っ越し心得十箇条」が手紙で届く感激。当日は有難い実働でのお助けも。友人、夫人たちにも助けられて、昼過ぎには部屋に段ボールが積み上がり、あらかた終了。引越屋さんも一緒に全員での昼食は、テーブル一杯に並んだ友人からの差し入れ、赤飯も個々への折詰弁当も夫人たちの丹精品。すべてが、六十五年もふる里を留守にして、余所者同然の自分への好意と思うには、過分にして真に落ち着かぬことでした。

「ふる里は遠きにありて思うもの……」と詠んだ詩人を知ったのは、一高在学の頃でした。そのふる里に自分は帰れた幸せ、思えばマンションの部屋探しで面会した不動産会社社長さんも一校の同窓生でした。母校に縁を得た沢山の方々のお助けに依る再びの土浦人、時にゴルフにも誘われるこの穏やかな日々を、もうしばらく恙なく過ごしたいと、切に願う昨今です。

母校土浦一高の益々の御発展をお祈り致し、感謝と共に拙文のペンを擱きます。

第21回アカンサスクラブ講演録
「守谷における地域コミュニティの地方創生事業への取り組みとコロナへの対応」

伊東　明彦（平成5年卒）

この度の本題に入る前に、若干の自己紹介や背景を話させて頂きます。私は、学部・修士課程において、土木工学を学んできました。土木工学は、英語ではCivil Engineeringと表記し、「市民」という単語が利用されています。また、土木工学の領域は幅広く、構造力学、材料、設計、地質学、環境、測量、都市計画、地球環境、災害と幅広い分野を学ぶ必要があります。私が大学4年生から修士までの3年間に所属していた研究室は、衛星リモートセンシングや国土管理を主な

研究領域としていました。これらの研究の経験をもとに、宇宙系の民間企業に入社し、衛星リモートセンシングを利用した環境調査、災害状況把握、農地管理等の研究・プロジェクト立案に関わらせて頂きました。なかでも、農林水産業の事業では、幾つかの事業立案に関わらせて頂き貴重な経験をさせて頂きました。

　このような中、守谷市出身の妻の弟が会社員を辞めて農業に従事、私がＰＴＡ会長を務めていた際の副会長も会社員を辞めて農業に従事するなど、私の周囲の方が農業に従事し、相談を受けることが多くなってきました。そこで、地域の農業を盛り上げるための組織を立ち上げることとしました。これまで、農業分野では、霞ヶ関での事業立案や研究活動としては、携わってきましたが、リアルな現場と向き合うこととなったのです。

　組織を立ち上げる過程では、収穫した農作物が高く売れることが必要なため、飲食店、加工事業者、小売り事業者などに声がけし、組織の中で６次産業化が実現できることを意識しました。組織立ち上げの過程では、同じ思いを持っている人を探し、私の思いを語り、仲間を募っていきました。また、同志を探す中で、組織の目的を議論し、**農作物・食品・健康**を有機的に繋げることで、地域資源の有効活用と持続的な地域活性化の好循環を狙うことを目指すこととし、名称は「もりや循環型農食健協議会」と名付けることとしました。また、会の正式名称が少し長いため、「もりや」と「アグリカルチャー」の単語を融合、そして「盛り上げる」を掛けて、略称「もりあぐ」と名付けました。

もりあぐの活動は、農業体験等の地域の農作物を知って頂く広報的な活動である「グリーンツーリズム事業」、地域の農作物を直接買える機会を作るための朝市等の「直販販促事業」、地域の農産物の価値を上げ、ブランディングしていくための「商品・メニュー開発事業」と定義しました。これらの事業計画は、農林水産省の「都市・農村共生対流交付金」に採択されました。これら３つの事業の取り組みや成果は、農林水産省や守谷市から高い評価を頂き、その後、守谷市の地方創生事業として取り組むこととなりました。地方創生事業では、これら３つの事業に「都市近郊農業モデルの構築事業」を加え、更に活動を発展させてきました。守谷市は、37㎢という狭い自治体ですが、水稲、畑作、畜産（乳用牛・肉用牛）といった３つの農業分野の出荷額がバランスよく構成されています。また、茨城県の玄関口の立地、かつ秋葉原から快速で32分というアクセスの良さから、東京からの企業や人が集まり、先進的な農業が実証できる環境にあります。これらの環境を活かして新たな都市近郊農業のモデルを構築していくことを目指し、先端企業、農研機構、茨城大学と連携し、将来の農業モデルを体験・実証できるアグリアカディミアを創設する事業を始めました。

　新型コロナは、地方創生事業としての取り組みを終えるタイミングで忍び寄ってきました。**もりあぐ**のメンバーには、飲食店も入っていますので、早期にテイクアウト事業を推奨しようと、テイクアウトをネット予約できるシステムを構築しました。これらの実績から、守谷市から相談を受け、守谷市・商工会・**もりあぐ**の３者協働で、飲食店を応援する「テイクアウト応援クーポン事業」を立ち上げました。しかしながら、年配者の中には、外食の文化がない方もおり、「出前」して欲しいといった声が聞こえてきました。今で言う、デリバリーです。当時は、ウーバーイーツ、出前館も守谷には進出していない上、進出したとしても、IT弱者の年配者は利用することは難しいと想像し、守谷オリジナルのデリバリーサービスを構築することとしました。このデリバリーサービスは、以下の３つが特徴となっています。事業性等の課題も抱えていますが、配食サービスの相談なども受けており、新たな可能性も感じています。

①利用者の注文は、「出前」と同じように電話で行い、飲食店と配送者の間をシステム化する。

②飲食店以外に小売り事業者もサービスに入れること。（小売り事業者のイメージは、酒類、米、精肉、菓子、パン類であり、お弁当と共に、ビールやおやつも注文できるようになります。）

③配送者は、貨物軽自動車運送事業者（黒ナンバーの事業者）に加え、客数が減っているタクシー事業者の参加による体制強化

　さらに、コロナ禍においては、様々な分野でのスマート化が求められていますが、農業分野も同様で、農林水産省の「労働力不足の解消に向けたスマート農業実証」に申請し、ドローンを利用した新たなスマート農業の実証にも取組みました。

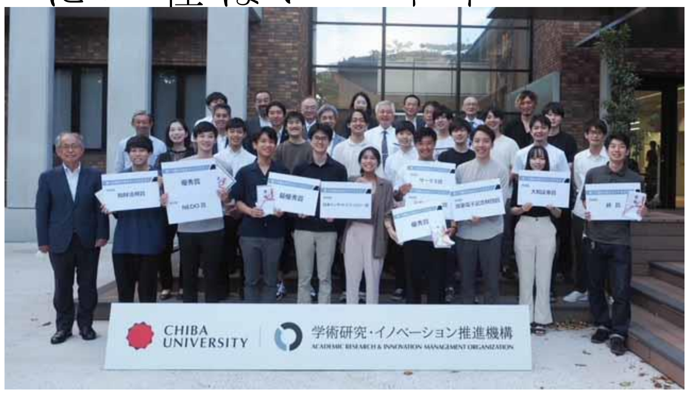
　このように「もりあぐ」は、地域で多くの事業を進めてきましたが、**もりあぐ**の活動は、「地域内を繋ぐ、住民参加型・課題解決型の新しい形のプラットフォーム」と考えています。地域の特性や課題に真摯に向き合い、課題を解決するために、地域の様々なレイヤーの方に協力して頂く、新たなコミュニティ・プラットフォームの形です。さらに、**もりあぐ**は、農作物、食品、健康に加え、医療、介護分野とも連携を始めました。地域の全ての業態が、同じ目標に向かって連携し合う新たな社会モデルが誕生しつつあります。

　私は、このように「もりあぐ」という組織の立ち上げ・活動を通じて、地域の新たな可能性を感じつつあります。これらは、最初に説明した、幅広技術分野を統合した土木分野の経験が生かされており、Civilの精神が根底にあったと感じています。これまでの経験を活かし、今後も、常に前向きに、かつ新たな挑戦をしていきたく考えています。

第12回リレー放談
「LIFE SHIFT 100年時代の体験」と「なのはなコンペ２０２１」のご紹介

「LIFE SHIFT 100年時代の人生戦略」の本のリンダグラットン先生によれば、これからの若い人は１００年生きるそうです。寿命が短い時代の「教育—仕事—引退」という、３ステージの生き方ではなく、引退が80～90歳になり、２番目の仕事のステージが長くなるといわれています。その時に大切なことは「スキル、人脈、そして健康」だそうです。私は昭和21年生まれですが、LIFE SHIFT 100年時代の人生を送りたいと願っています。

　私が関係した産学連携「なのはなコンペ２０２１」をご紹介します。私は米国ボストンのDECというコンピュータ会社にいましたが、52歳でIT会社（日本インサイトテクノロジー（株））を銀座４丁目で起業し、今年で23年になります。最近の会社の仕事は自動車会社、金融生損保、官公庁のDX（デジタルトランスフォーメーション）の仕事が多いです。会社は王子製紙本社近くの「紙パルプ会館」にあります。創業当時は不規則な起業家生活で２回大病を経験しましたが、幸いにも医学薬学の進歩に助けられ命拾いしました。



　現在は仕事中心の生活を反省し、家の近くの砧公園のランニングとゴルフを始めました。ゴルフは茨城の実家の阿見町に近い、龍ケ崎カントリー倶楽部で、エージシュートを目指して月２～３回スキルを磨いています。

　千葉大学院の非常勤講師を13年程やった縁で、約20年間、千葉大学の起業家育成支援プログラム「なのはなコンペ」を後援してきました。２０２１は「グリオーマを対象とした生体内安定なα線治療薬剤の開発」の医学薬学府、融合理工学府の学生チームに、日本インサイトテクノロジー（NIT）特別賞を差し上げました。グリオーマのα線治療薬剤の研究成果は今後、日本初のメラノーマ、すい臓がん、前立腺がんの治療に貢献できると期待しています。

「なのはなコンペ２０２１」

千葉大学学術研究・イノベーション推進機構は学生の「企業家精神」を高める目的でコンペティション（なのはなコンペ）を企画開催。２０２１年度は14チームが最終審査に臨む。市場ニーズと研究の背景：脳腫瘍のグリオーマは再発率が高い、希少疾患で、有効な治療法は確立されてない。グリオーマの膠芽腫の５年生存率は10％程度。核医学治療では、腫瘍に集まる性質を持つ分子に放射線核種（標的）を結合した薬剤を患者に投与し、腫瘍に到達した薬剤から放出される放射線の細胞障害作用で治療を行う。２０１６年、末期前立腺癌患者がα線治療で寛解した臨床応用例が報告され、世界的なα線治療薬剤の開発研究に多大な波及効果を与えた。オリジナリティ：生体内安定な211At標識薬剤を用いた、グリオーマのα線治療。211Atは甲状腺、胃、脾臓に集積する副作用で実用化に至っていない。当該研究では211Atを安定に結合可能なネオペンチル型標識母体を開発した（特許）。標識母体をアミノ酸に応用し、グリオーマを標識とした生体内安定なα線治療薬剤を開発中（特許）。本研究の薬剤が実用化に至れば、日本発の治療薬剤として、世界の211At標識治療薬剤の開発を先導できるとともに、α線治療の発展に大きく寄与できる。

　世界は１００年に一度といわれるCOVID-19のコロナ禍の厳しい時代を経験し、２０２１年９月末の現在、東京も緊急事態宣言の中にあります。残念なことに日本の製薬業は弱く、コロナワクチンは１００％海外に依存しています。長寿時代を迎え、国を挙げて日本の製薬業界の研究開発体制の強化・推進が必要です。海外の製薬会社に負けないように頑張っていただきたいと思います。

　以上、簡単に「なのはなコンペ２０２１」の最優秀賞となった、難病グリオーマの治療薬の研究を紹介しました。日本は近年、化学、物理学の基礎分野で活躍は目覚しく、更なるノーベル賞候補も期待されています。

　化学賞では化学物質の自己組織化という現象を応用した「結晶スポンジ法」の東大藤田誠卓越教授が注目されています。彼は千葉大工学部化学科の出身で、研究成果を化学製薬研究開発に応用すれば世界の化学製薬業界の発展に大きく寄与できるでしょう。

　物理学賞では東大の香取秀俊教授の「光格子時計」が注目されています。３００億年に１秒しかずれない正確さで、１秒の見直しに使われる可能性があると期待されています。香取教授は土浦一高の出身です。日本は諸外国から国民の起業家精神（アントレプレナーシップ）の育成が非常に大切と指摘されています。

　コロナ禍後の日本の元気は若者や大学、企業の「イノベーション」をもたらすための「アントレプレナーシップ」、「ベンチャーマインド」なしではありえないと確信しています。日本のコロナ禍後の困難な現状を改革し明るい未来を切り拓ために、藤田教授、香取教授の後を継承するような若者をLIFE SHIFT 100年の時代に応援したいと思い、「なのはなコンペ」を応援しています。土浦一高OBとして、母校から沢山のアントレプレナーが生まれることを期待しています。

　次号のリレー放談は、クラスメートの木内里美さん（昭和40年卒）にバトンタッチします。興味深い話を楽しみにしています。